
そして、それは愛となって

天城 百於馨

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

そして、それは愛となって

【コード】

N9272B

【作者名】

天城 百於馨

【あらすじ】

最後の声は届いたのか……？総ての終わりが 総ての始まりとなる……。

そして、それは愛となって

(前書き)

何も保証の無い世界へと足を踏み入れてしまう少女と、彼女と分かり合えなかった少年との切ない物語です。

そして、それは愛となって

「飛び下りって、落ちる途中で気を失っちゃうから痛みを感じないんだって」

数週間前、教室で誰かがそう言った。

この高校の屋上は、高く頑丈なフェンスに囲まれている。それを乗り越え、飛び下りる……
ほとんど不可能に近く、有り得ない話だった。

ある授業の時間

そして、それは愛となって

「誰かの携帯鳴ってない？」

「ハッピーバースデーの歌じゃん？」

「寿人^{ひさと}、おめえの携帯だよ」

「オレ？」

オレはきよとんとした。

「授業中は電源切つとけ」

先生から冷ややかに注意を受け

「早く止めるよ」

クラスの奴は苦笑いしていた。

「悪イ……」

そして、それは愛となって

オレは携帯を探し、まずは学ランのポケットの中を

(あれ!?)

見付からない。

次にバツクの中

(あつた!)

やっと見付かり、ディスプレイを見るとグリーンティングの文字

が……

(何だこれ?)

オレは首を傾げ、とりあえず電源を切った。

「ごめんね……」
「?」

休み時間になると同じクラスの未空^{みあけ}という女子がオレに謝って来た。

「何が?」

「さっきグリーンティング来たでしょ?」

「ああ、来たけど?」

「あれ、あたしが送ったの……」

と小さく、か細い声で未空は言った。

「そうなんだ……」

とオレは特に何のリアクションもしなかった。

「授業中に鳴らしちゃってごめん。夜の10時と朝の10時を間違えて設定しちゃったの……本当ごめんッ!」

未空は手を合わせ、申し訳なさそうに言った。

「はは……いいよ。別に」

とオレは愛想笑いをし

オレと未空は、特別に仲が良いわけではない。
オレは『未空』、未空は『寿人』と下の名前で親し気に呼ぶが

オレは未空に興味が無い

それが事実で

未空はそうでは無い

それが真実だった。

同じ年の夏。

「？」

授業中、未空からメールが来た。

『次の休み時間、屋上に行かない？』

オレは返信した。

『何で？』

未空からのメールを受信。

『話があるから』

オレが返信。

『分かった』

そして休み時間。オレは屋上へ向かった。

「気持ちいいね。屋上って？」

屋上で両腕を広げ、未空は伸びをした。

白地に黒のセーラーの襟が風で煽られ揺らめく。

そして、それは愛となって

「寿人」
「ん？」

オレは寝不足気味だったので顔を空に向け、欠伸した。

「ここから落ちたら凄いな？」

「は？」

未空の台詞に驚いたオレが振り向くと

「……………」

フェンスの向こうに

未空はいた。

「何してんだよ……………」

「ここから落ちたら凄いなと思わない？」

未空は笑っていた。

「何でそんなとこ居んだよ……………!？」

「大きな声出さないで」

未空は真っ直ぐな瞳でそう言った。

「……………!」

オレは焦って辺りを見渡す。

「!？」

するとフェンスの一部にぽっかりと空いた穴が見付かった。金網が錆びて、すっかり脆くなっている。

「……………」

そこへ行き下を見ると、そこから見える下の風景に吸い込まれそうになる。目眩を感じ、オレはすっかり足がすくんでしまった。

「……………くそっ!」

そして、それは愛となって

そして、それは愛となって

身体はガタガタ震え、もはや冷静な判断もできなかつた。
「寿人」

「何だよ？」

「聞きたいことがあるの」

「聞きたいこと？」

「うん……」

「何だよ？」

未空はとても穏やかな笑顔をしていたが、オレの眼はその時多分、
血走っていたと思う。

「もっと後ろに下がって」

「何で？」

「下がったら言う」

オレは二、三步後ろに下がった。

「下がったぞ？」

「下を向いて」

オレは下を向いた。

「向いたぞ？」

「じゃあ言うね」

「……」

そうしている間、オレは苛つき息が荒くなる。

「あたしのこと、どう思ってるか……」

「？」

「そこで言ってる？」

「……？」

オレは顔を上げようとした。

「下を向いたまま！……」 答えて

オレは仕方なくまた下を向く。

「言ってる？」
優しく未空が問い掛ける。

「……………」
オレの脈拍はどんどん上がって行った。
そして、オレは……………」

「好きだ　！」

そう叫んだ。　目をぎゅっと閉じ。（だから死なないでくれ）
と願って

「……………」
静かだった。その時も、涼しげに風が吹き　ゆっくりとオレは
顔を上げる。

「……………」
屋上の周りを囲む高いフェンスの向こうに

水色の空が見えた。

「何で……………？何でだよ　！？」
オレは絶望した。
「オレは……………“好きだ”って言ったのに……………」

そして、それは愛となって

そして、それは愛となって

あの言葉は偽りだった

はずなのに

今更……

消えた未空が愛しい

そして、それが恋愛^{あい}感情へと変わったことに気付く……。。

(後書き)

余韻が残ると感じて頂ければと本望でございます。感想などは是非、よろしく願います。

そして、それは愛となって

そして、それは愛となって

PDF小説ネット発足にあたって
PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9272b/>

そして、それは愛となって

2009年5月16日18時01分発行